**世阿弥研究会18年5月22日(火)　講読範囲の内容の要旨の報告**

目次

一、「浅深之事」(浅深のこと)「213頁初め～214頁初め」1頁

二、感想および考察と次回の予定 1～2頁

参考文献 2頁

**一、「浅深之事」**(**浅深のこと)「213頁初め～214頁初め」**

ここは、能における謡・舞・所作やそのほかの万事にわたってしぐさの大小についての教えが説かれているところです。

しぐさが細かくないと能はおもしろくないし、だからといって細かとばかりに心がけていると芸の幅が小さく見える傾きがあって、反対にしぐさを大まかにと心がけてやると観どころの少なくなって、のそりとしたものになってしまうことが語られてあります。

そこで演能においては、細やかにやるべきところはたっぷりと細やかに演じ、大ように演ずべきところは大ようにゆくべきであり、この識別をするためには、特に能というものを知っていなければならず、この点をよくよく師匠について明らかにすべきだということが示されます。

その要点は「心のはたらきを細やかにして、しぐさ(身体)のはたらきを大まかにする」ということにあるので、二曲、振、風情、万につけてこの点をよく注意して、いつも心にとめていなくてはならないということでありました。

その上で能というものは、大まかな規範(大きなる形木)から入った芸は、心がけひとつで細かな方面にも展開することができるが、小さい規範(小さき形木)から習っていった芸は、大ような芸風にはちょっと進めないものであるということを「大のうちに小はあるが、小のうちに大はありえない」ということでまとめ、大小の両方を兼ねて自由に両者をこなしてゆくのは、本当に広い芸なのであるということを述べています。

また「大寒には氷結と氷解とがあるが、小寒には氷結だけだ」というたとえを引用しつつ説いています。なお、「小寒の氷大寒に解く」とは、寒さの最も厳しいはずの大寒が小寒よりも暖かなことで、物事がかならずしも順序どおりにいかないことのたとえです(松村明編『大辞林第三版』三省堂,2006, p.1221.)。

また「形木」というのは、世阿弥の用語で、「刑木」とも書き、基準となる型または模範となる演じ方のことです(小林責、西哲生、羽田昶著『能楽大事典』筑摩書房,2012,p.190.)。

**二、感想および考察と次回の予定**

① 5月の世阿弥研究会では『世阿弥能楽論集』「花鏡」から「浅深之事」(浅深のこと) (213頁初め～214頁1行目)までの講読が行われた。

② 「浅深之事」(浅深のこと)では能における謡・舞・所作やそのほかの万事にわたってしぐさの大小・大ようさ・細やかさについて具体的に考えながら確認をしてくることができた。

③ 前半ではそれを臨床心理学の河合隼雄先生や数学の岡潔先生の姿勢と辿られた人生の中に見る「浅深のこと」として考え、博士論文や修士論文の構想とも対応させながら考えることができたところが大変興味深かったと思われた。

④ また学問が学問であり芸術が芸術である由縁はoriginality(世阿弥の言うめずらしさや面白さ)にあるが、そのoriginalityを理解することが出来る人は少なく、博士論文ならば、学生は制度としての博士論文と同時に本物の博士論文の道を目指していくことが重要で、先生は論文指導を通じて上手く学生の持って生まれた素質を引き出し、学生の将来の可能性を伸ばしていくべきであるのだということを理解させて頂くことができた。

⑤ 次回の世阿弥研究会は6月26日(火)に18時より河村能舞台の楽屋で行われ、講読は『世阿弥能楽論集』「花鏡」の214頁6行目からの「幽玄之入レ境事」(幽玄の境に入ること)からである。

⑥ また次回は30分くらいの河村博重先生による「観世榮夫」先生のレクチャーも行われる予定である。

参考文献

① 小西甚一編訳『世阿弥能楽論集』「花鏡」たちばな出版, 2004, pp.188～238.

② 松村明編『大辞林　第三版』三省堂, 2006, p.1221.

③ 小林責、西哲生、羽田昶著『能楽大事典』筑摩書房, 2012, p.190.